またシベリア生活が思い出される。最後に越後線巻駅長となり、無事任務を終えて昭和五十一年二月退職して、国鉄の関連会社の新潟鉄道用品運輸株式会社に入社した。

入社二年目役員となり、取締役輸送部長となる。それから新しく商事部をつくり十二年の会社生活に終わりを告げ、昭和六十三年六月、会社を退職した。

現在、国鉄OB会の幹事、戦友会、全抑協等、また老人クラブの副会長として暇のない毎日を有意義に過ごしており、また余暇を見て詩吟、囲碁をやり、家内と充実した生活をしております。

今、自分の人生を振り返ると、初年兵の苦しい軍隊生活と四年半のシベリアの抑留生活など、あの過酷な労働が時折よみがえってきます。

亡き戦友の冥福を心から祈ります。

シベリア強制抑留体験記

岐阜県　長澤秀道

昭和二十年八月十五日、戦争が終わった。だれしもが「さあ、国へ帰れる」と思っていた。だがこの思いに反して、これから過酷な運命が待っていた。私の人生の中で消すことのできない悪夢が始まった。シベリア強制抑留であった。

ところは北朝鮮、平壌新里の航空教育隊である。この隊舎はすぐ北側に陸軍飛行場、西に大同江を隔てて丘陵上に乙密台、玄武門（旧王宮）が望めるところにあった。

十八日、飛行場にソ連軍の軍使と一箇大隊ほどの部隊が着陸してきた。目的は、平壌に駐屯している部隊の武装解除をして、三合里（さんごうり）（陸軍演習場）へ集結させるためであった。

私は昭和十九年、文科系、教育系学生の繰り上げ卒

業で九月に卒業式を終え、特甲幹として入隊した。

当時三万といわれていた平壌駐屯の各部隊はマンドリン（小銃）を手にしたソ連兵によって武装解除を受けた。二十日夜、部隊編制のまま食糧、被服その他できるだけのものを持って三合里へ出発した。翌朝、三合里収容所の厩舎に入った。ここがこれから二カ月間の住まいになったのである。ここでの作業は、トラックで旧部隊の糧秣庫、被服庫からの物資の運搬と燃料となる樹木の伐採が主であった。すべてソ連兵の監視下で行われた。

抑留された当初のソ連兵は若くて程度の低い感じの兵隊が多かった。交代があるのか、二年目からは多少ましな兵隊が来たような気がする。掛け算ができないらしく、五列縦隊に並んでも一人一人数えていくので時間がかかること夥しく、点呼に三十分もかかったことを覚えている。百以上の数は数えられないようであった。しかし、時間がかかっても気候がよいときは助かっていたが、冬は大変であった。

十月中旬になって、平壌駅前へ集合せよとの命令が伝えられた。他の部隊とともに千人ほどの単位で大隊が編制され、駅へ向かった。「さあ、帰国できるぞ」との思いは全員同じ気持ちであった。乗った列車はしばらく北上してから東へ向かった。いやにスピードが遅い。「これは日本海側の港から帰国するのかなぁ」と話し合った。三日目の朝ようやく元山に着いた。そこからまた北上して興南の駅で降ろされ、昔の工場の建物の収容所に入れられた。ここは港町である。翌日から付近の山に入り、燃料になる樹木の伐採、運搬ばかりであった。

十一月下旬になって寒さが急激につのり、零下二〇度、三〇度になった。しかし、このころは「必ず帰国できる」という希望があった。ソ連兵に聞いても「東京ダモイ」の連発であった。

間もなく港に巨大なソ連船が入港して、我々二千人が乗船させられた。船が出港して数時間たって船底から甲板に出てみると、北西に雪を冠った山々が見える。海岸沿いに航行しているようである。これは「北海道あたりへ上陸するのかぁ」と思った。他の者も同じこ

とを考えているようだ。三日目の夜、船は氷を割りながら少しずつ進んでいるようである。

突然「全員下船せよ」との命令で、暗闇の中タラップを降りる。降りたところは氷の上であった。既に興南の収容所で冬服、防寒帽、防寒外套、防寒手当、防寒靴に着替えていたので相当の寒さには耐えられたが、いきなり氷の上を歩かされたのには驚いた。百メートルくらいで砂浜らしきところに着いた。うっすらと明るくなって周りを見ると、近くの山の麓に民家が数戸点在する漁村のようであった。ここで初めてソ連の民間人を見て、ここがシベリアであることをいやでも認識せざるを得なかった。私は今でもその地名がわからない。

ここから、いまだに何のためであったのかわからない雪中行軍が始まるのである。五十メートル間隔でソ連の監視兵がマンドリンを担いで「ダワイダワイ」とせき立てる中、行く先も目的もわからず、何もない荒漠とした山中を重い外套を引きずりながら、頭を下げてただ黙々と歩くのみである。長い長い行列であった。ここで思いがけないことが起こった。途中睡眠不足と疲労のため雪の上に腰をおろして眠る者が出てきたのである。このことは、シベリアでは凍傷から死を意味するのである。助け起こして歩かせようとするとソ連兵に銃剣でせき立てられる。もっとも自分も体力の限界で、歩くだけで精いっぱいであった。

そのときの光景は、五十年間私の脳裏から離れない。アルプスの山中のようなところで、平壌以来の戦友を何人も置き去りにしてきたことは、私の抑留生活の汚点として残っている。このころ、興南から持ってきた食糧は底をついていた。

朝から夕暮れまで、はっきりとわからないが三十キロは歩いたであろうか。夕日が沈むころになって、右手の谷底のようなところに二十棟ほどのテント村が見え、煙が上がっていた。一棟の長さが二十メートルぐらいあった。中は両側に木の二段ベッドが作られていた。昔のシベリア流刑者用のテント村であろうか。二十棟のうち五棟ぐらいには先客があった。聞けば、北鮮国境守備隊の独歩の人たちで、伐採の仕事をしてい

るとのことであった。

ここで赤いコウリャン飯の配給がある。今でも忘れられない味であった。地獄に仏である。食後、テント村に入り泥のように眠ってしまった。翌朝の点呼で、二千人中やはり四十人ほど足らなかった。何とも残念である。

私がここで言いたいのは、公称六万人と言われるシベリア抑留死亡者の中に、入ソ当時各地で起こったこれら置き去りにされた人たちは入っているのであろうか。おそらく員数外であろうと思われる。何とも痛恨の極みである。

点呼後、私たちの大隊は食糧を仕入れて再び行軍に入った。道幅は少し広くなったが、相変わらず深い山の中である。三時ごろ海岸の見えるところに出た。遠く下の方を見ると、見覚えのある民家が数軒あった。何のことはない、私たちはぐるっと楕円形に一周したことになったのである。戦友を失ったこの行軍は、本当にどんな意味があったのであろうか。今考えても悔しい思いでいっぱいだ。

その後、スーチャン収容所の分所に入り、いよいよ本格的なシベリアの収容所生活が始まったのである。ここは炭鉱の町であるが、なぜか私たちの分所は十キロぐらい奥地にあったせいか、伐採の仕事が主であった。ここで千島守備隊の兵隊と一緒になり、北海道出身の兵が多かったようで、千島の話をずいぶん聞かされた。

零下三〇度、四〇度の中の作業が続き、畳一枚ぐらいのところに二人が入り、寝返りもできず、服を着たままの生活、夜はシラミと寒さとの格闘が続いた。外の便所に行くときも大仕事であった。

しかし、最も体力を消耗したのは夜中の臨時作業であった。集中的に必ず十二時ごろ起床がかかり、約二キロ離れたところの線路に入っている貨車に石炭を積み込む仕事であった。五十人ぐらいで約一時間で終わったが、これには若い私もさすがにまいってしまった。

一日練兵休をとって医務室に行くと、堂々とした体格の女の軍医にいきなり三十センチぐらいの棒の聴診器を胸に当てられたのにはびっくりした。注射を打た

れて一週間の軽作業という診断であった。ラーゲルの掃除で、まあこれは遊んでいるようなものであった。

五月のメーデーは祭日である（ちなみに十一月七日の革命記念日も祭日であった）。この祭日が済んで間もなく私たちのうち二百人が、イマン近くのコルホーズへ派遣されることになった。広大な農場での農作業であった。分所の一日三百グラムの黒パンと、何が入っているのかわからない岩塩スープだけの生活を思うと、コルホーズは天国であった。一般ソ連人とも自由に話ができ、食生活もまあまあであった。これで体力が回復できると思った。しかしここでの作業は二カ月ぐらいで、再び移動命令が出て列車に乗った。着いたところは前の収容所でなく、ナホトカの駅から八キロほど入った第二収容所であった。

ここは六百人ぐらいのラーゲルで、仕事は石の切り出し作業である。毎日近くの石山へ行って、港の岸壁用石材づくりであった。これも三カ月ぐらいで、次は集合住宅の建築作業に変わった。その間に時折、ソ連人の個人住宅のペチカ修理などもあって、収容所生活にもいくらか余裕が出てくるようになった。慣れであろうか。しかし、冬になると酷寒の地での作業がきつく、食事も少なく弱っていく兵隊が出てきて見るに忍びなかったが、どうしようもなかった。

あるとき、ソ連赤十字からはがきが一枚ずつ配られ、家に出すことになった。夜うす暗い電球の下で、余分なことを書いてにらまれないよう、ソ連領内に元気でいることだけを書いて両親に知らせた。今もそのはがきは大切に持っている。

収容所で二冬を越した三月ごろ、三月といっても氷は溶けず、吹雪の日が多かった。そんな中を作業に出かける毎日であったが、ある日、港に日本の船が入ったという噂が流れてきた。しかし、今まで何度も「ダモイダモイ」で騙され続けてきた我々にとっては信じられないことであった。だが、今回は港の作業員が確かに船尾に日の丸が立っていたと言うので、信じたい気持ちになっていた。

四月二日、作業は休み。兵舎へ収容所長と通訳が来て、明後日乗船して帰国させるので準備をするように

とのことであった。このときの喜びは筆舌に尽くし難いものであった。

四月四日はまた吹雪の日になった。朝早く集合して岸壁に向かう。約八キロの道のりの短かったことを覚えている。港の広場に長いテントが張ってあり、入口で名前を呼ばれた順に入って、誓約書のような紙に署名をさせられた。何が書いてあったか覚えていない。読まなかったのである。それより、帰国できるのなら何でもしてやる、という気持ちの方が強かった。

岸壁に横づけされているのは、まぎれもなく日本船である。吹雪の中でも船腹の「明優丸」の文字ははっきりと読み取れた。船尾の日の丸、甲板の船員さん、看護婦さんを下から見上げていたら、思わず感涙にむせんだ。嬉しかった。

しかし、乗船直前になって名前を呼ばれて奥地の収容所へ送られた者がいるとの話を聞いていたので、名簿を持って監視しいてるソ連軍将校の顔を見ないようにして船のタラップを上がっていった。

私たちが船内に入って約一時間後、船は汽笛とともに動き出した。船長のねぎらいの言葉、看護婦さんの笑顔、白い御飯、この感動は終生忘れられない思い出である。出港して二日目、船内のラジオから高校野球の放送が流れてきた。懐かしかった。

四月八日、船は舞鶴港に入った。甲板に出て山々の緑の松の木を見たとき、日本の景色に胸がいっぱいになった。とにかく緑に飢えていた。検疫、消毒などの手続を済ませて上陸した。旧海兵団の兵舎に入って、青い畳の上に大の字になり静かに目を閉じた。

それから三日後、夢にまで見た故郷の両親のもとに帰り着いたのである。

何度も何度も騙され続け、過酷な労苦に耐えた足かけ三年のシベリア抑留は一体何であったのか。謎の雪中行軍でも、長い収容所生活の中でも多くの戦友を失った。凍土を鉄のポールで掘って友を葬ったこともある。

五十年後の今でも、私は心の奥底にソ連（ロシア）に対する強い憎しみは消えていないのを感ずる。

すべてがポツダム宣言、停戦協定、ジュネーブ条約

に違反したことではないか。亡くなった友を思うと、ソ連のやった終戦後のシベリア強制抑留の不当性は徹底して追及しなければならないと考えている。

【執筆者の紹介】

大正十二年十一月八日　岐阜県不破郡荒崎村（現在大垣市長松町）、浄土真宗（敬思寺）の次男として生まれる

昭和十九年九月　岐阜師範学校卒業

十月　四国松山連隊入隊

昭和二十年四月　朝鮮平壌　師三四二〇七五部隊転属

八月十五日　終戦　ソ連軍に武装解除される

シベリア抑留（スーチャン、イマン、ナホトカ）

昭和二十二年四月　明優丸にて舞鶴復員

昭和二十二年四月二十二日　安八郡南平野小学校復職

昭和二十五年　結婚、現住所に居を構え、現在に至る

その後、県内小中学校を歴任

昭和五十八年三月、武儀中学校教頭を最後に三十九年の教員生活を終え、その間、教え子数千名を数え、多くの子弟に慕われておられる。

現在、全抑協岐阜県連の役員として活躍中で、貴重な人材である。

（岐阜県　鈴木　善三）

終戦後五十年を迎えたが

静岡県　石川　博

歓呼の声に送られて我々は祖国を後に、妻子のある者は妻子を残して祖国のために出征した。それを日本国民として誇りに思っていた。赤い夕日の満州に渡り、各所で部隊として行動し、治安維持のため勤務していた。南方の戦闘が激しくなるにつれ、満州の関東軍の精鋭も兵器とともに南方に向かい、戦闘に参加した。